

出会いは世界を広げていく

交流会を通して

第9回

土肥いつき DOHI ITSUKI

京都の公立高校教員。24時間一人パレード状態のトランス女性。趣味の交流会運営で右往左往する日々を送っている。

担任としての経験

交流会をしていると、「交流会の日にクラブ活動があるので」と欠席するようになる参加者がいます。そんな時、寂しさを感じる一方、「よかった」とも思います。なぜなら、クラブ活動に参加し、「普通の」学校生活を送れるようになったということだからです。

交流会は、あくまでも学校を補完するものだと思います。したがって、学校に居場所ができれば、みんな自然と交流会から離れていきます。次に交流会に来る時は、多くの場合「いい報告」をしてくれたり、卒業生として後輩たちのサポートをしてくれたりするようになります。では、学校の中の居場所とはどこか。その最も基本的な場所はやはり「クラス」だろうと、わたしは考えています。そこで、今号と次号では、交流会の前提としてのクラスづくりについて書こうと思います。なぜなら、クラスで「できないこと」こそが、交流会が担わなければならないことだからです。

わたしは教員生活5年目にはじめて1年生を担当をし、そこから3回卒業生を送り出しました。

はじめての担任の時は、大張り切りをしていた記憶があります。まず、入学式の週にみんなでクラススローガンを考えました。その時のスローガンは「君は一人じゃない。後ろには48人の仲間がいる」でした。模造紙を4枚ほどつないだ紙をつかって、習字が得意な生徒にこのスローガンを書いてもらい、クラスの後ろに貼り出しました。突然貼り出された巨大なスローガンに、教科担当がびっくりしていたことを覚えています。ちなみに、なぜこのスローガンにしたのかを生徒に聞くと「先生がこれにしたそうだったから」とのことでした。夏休みには同じ担任団の反対を押し切って、全戸家庭訪問をしました。この時は、とにかく「土肥色」を前面に押し出したクラス運営をしました。

人権教育の世界には「非行は宝」という言葉があります。当時のわたしは「宝の山のクラスをつくらう」と思ってヤンチャな子らを集めたので、たいへんなクラスになりました。いわゆる生徒指導に引かかるのは日常でした。生徒が謹慎になると、「話し込むには

ちょうどいい」と、家庭訪問を繰り返しました。ただ、一番焦点化していた生徒が進級できず、その責任をとって、2年次には担任を外されてしまいました。それでも翌年、担任に復帰して3年生を持ち、再びヤンチャな子を集めました。文化祭の演劇では「進学クラスに負けるな」とハッパをかけました。その言葉に答えてくれたのか、みんな真剣に演劇にとりくみ、進学クラスをおさえて2位をとることができました。

翌年、2度目の1年生の担任になりました。この時もヤンチャな子を集めたクラスをつくりました。謹慎になる生徒や家出する生徒がおり、1年間の家庭訪問は100日にもなりました。一方、わたしのクラスには在日コリアン生徒であるSさんがいました。わたしの勤務校には在日外国人生徒が集まる「社会科学研究部（以下、社研）」というクラブがあります。社研の活動が交流会の源流となりますが、それはまたあらためて書くことにします。わたしはSさんを社研に誘い、一緒に活動することにしました。Sさんは社研の活動を通して出会った民族名を名取る同胞生徒に刺激を受け、1年生の3学期に民族名を名取りました。

また、わたしは部落の生徒とのつながりを求めて週1回隣保館で行われている高校生の集まりにも参加していました。3年生を担当した時は、部落出身生徒のTさんがクラスで自分の立場を語りました。

このように、カミングアウトする生徒が出てきたのですが、いつも「何かが違う」と思っていました。もちろん、生徒たちのカミングアウトに違いはありません。しかし、社研も隣保館の集まりも、クラスを補完するものでしかありません。ふたりのカミングアウトはそこでのつながりをもとにしたものであり、クラスに基盤を置いたそれではなかったのです。それができていないということは、当時のわたしのクラスづくりには何かが足りないということだと思いました。

そこで、3度目の1年生を持ったわたしは、やり方を大きく変えることにしました。そこで次号には、その時の実践について書こうと思います。